

V 研究活動—資料報告・研究ノートなど—

1 新潟市西蒲区重稻場遺跡群の前期終末縄文土器と黒曜石 —信州産黒曜石を多用する縄文時代前期終末集落の位置づけ—

前山 精明

(1) はじめに

日本海に接して連なる「弥彦・角田山塊」の北端「角田山」の東麓には、縄文時代前期終末の遺跡が10箇所あまり分布し、新潟県内におけるこの時期の遺跡密集地帯をなしている。中でも重稻場（おもいなば）遺跡は、上原甲子郎氏による報告〔上原1956〕以来、新潟県内を代表する当該期の遺跡として知られてきた。本遺跡については土器の一部がしばしば取り上げられてきたが〔山口1981、新潟県1983、新潟大学考古学研究部1995〕、1995年に刊行された『巻町史 通史編1 考古』において遺跡の大要を筆者が示し、その実態が明らかになった〔前山1995〕。同書では重稻場遺跡に隣接する道上（どうだ）・上田（うえだ）の2遺跡を含めて「重稻場遺跡群」としてとらえ、重稻場を第1遺跡、道上を第2遺跡、上田を第3遺跡と呼称した。その理由は、三遺跡が互いに接近しながら前期終末の短期間に形成され、いずれの遺跡も信州産黒曜石の多用を特徴とするからである。現在これらは別個の遺跡として登録されているが、上記のような名称が既に一般化しているため〔寺崎1999、大工原2002、今村2006bなど〕、本稿でもこれを用いる。

巻町史では二つの課題が残った。第一点は主要資料の一部が提示できておらず、土器群全般の理解も十分でなかったこと、第二点は本遺跡群で多用される黒曜石について具体的な言及ができなかったことである。よって本稿では、重稻場遺跡群の概要を(2)で記した後、前期終末土器と黒曜石の主要資料を(3)・(4)で提示し、角田山麓の前期終末における本遺跡群の位置づけを考える。

(2) 重稻場遺跡群の概要

角田山周辺の縄文時代前期終末（真脇式～朝日下層式平行期）遺跡の位置を第1図上、本遺跡群付近の地形を同図下に示した。図のように、第1遺跡～第3遺跡は南北300mの範囲に分布しており、北から順に概要を記述する。

重稻場第1遺跡（重稻場遺跡）

本遺跡は、上原甲子郎氏によって1940年代に発見された。同氏の記述〔上原1956〕によれば、遺跡は通称「木島山」の一帯に広がりをもち、時期を異にする複数地点に分かれたという。しかし、巻町史編纂にあたり実見した上原氏所蔵資料から、そうした記述を検証することは

できなかった。

遺跡が立地する木島山では1960年代中ごろに土砂採取が行われ、ほぼ全域が削平された。本稿で示す遺物の大半は南端に残る丘陵斜面の末端から山口栄一氏と筆者が1960年代末から1970年代にかけて採集したもので、「南部地区」と呼称する。これとは別に南部地区の北方100mほどの削平地北端付近でも遺物を採集しており、「北部地区」と呼称する。採集遺物は前期終末土器、石鏸、礫石錐、石核・剥片、玦状耳飾などからなる。

重稻場第2遺跡（重稻場西遺跡）

木島山の西方に連なる細長い低丘陵、通称「道上」地内に所在する。1960年代に行われた土砂採取で全域が失われ、現在は削平区域が畑地として利用されている。現存する遺物は削平以前に若月昭宏氏が採集したもので、前期終末土器、石鏸、礫石錐、磨製石斧、石匙、石錐、石核・剥片、骨針からなる。本遺跡は、その後2016年に「重稻場西遺跡」として登録された。

重稻場第3遺跡（上田遺跡）

第2遺跡の南西に隣接する東西100m・南北80mほどの台地上に立地する。上原甲子郎氏によって1940年代に発見され、同氏によって概要が報告されている〔上原1956〕。本遺跡は果樹園や畑として利用され、本遺跡群の中で主要部分が残る唯一の地区となっていたが、1990年に土砂採取の計画が明らかになり、同年10月に確認調査を実施した。調査は1m四方の試掘地を40箇所設け、北東部と南西部で遺物包含層の遺存を確認した。この結果をうけて、北東地区122m²、南西地区192m²を対象とした発掘調査を1991年6月上旬から8月下旬までの間に行った。

遺跡が広がる台地は標高13～14m台を測り、沖積地との比高3mほどの平坦地をなす。遺物包含層が比較的良好に遺存していた南西地区では、基盤層（赤褐色粘土）上に30cmほどの腐植土が堆積し、I層（黒褐色表土）下のII層（暗褐色軟質土）が本来的な遺物包含層にあたる。

遺構は北東地区から竪穴住居跡1棟・土坑2基など、南西地区から竪穴住居跡状遺構2箇所・土坑6基などを確認した。北東地区の竪穴住居跡は、長軸5.5m以上・短軸3.8mの楕円形を呈する。主柱穴とみられる4基のピットを確認したが、炉跡を見出すことはできなかった

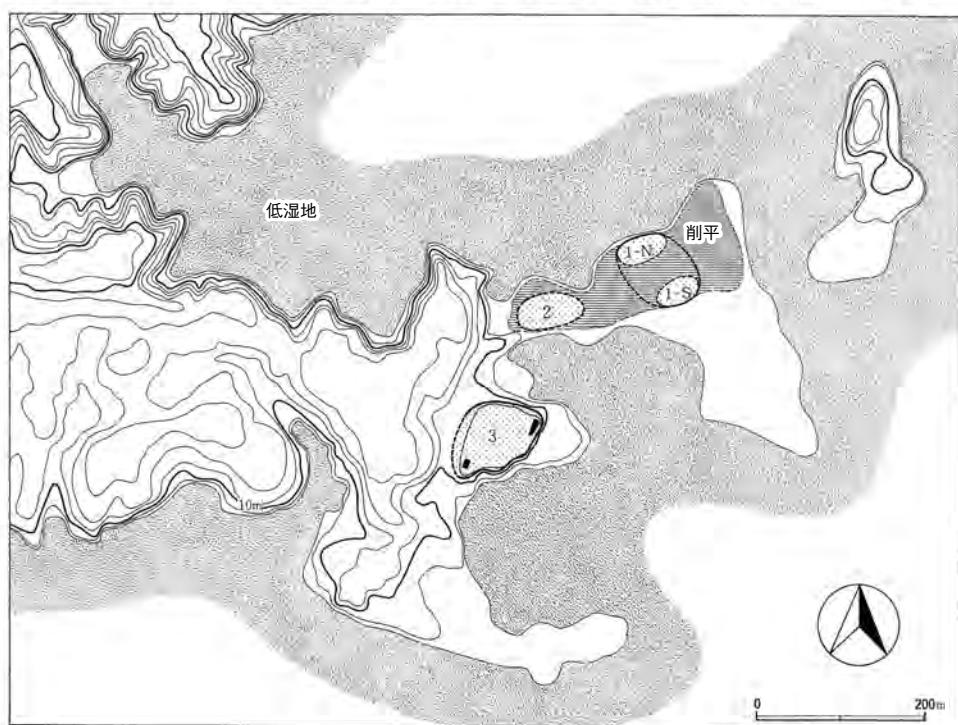
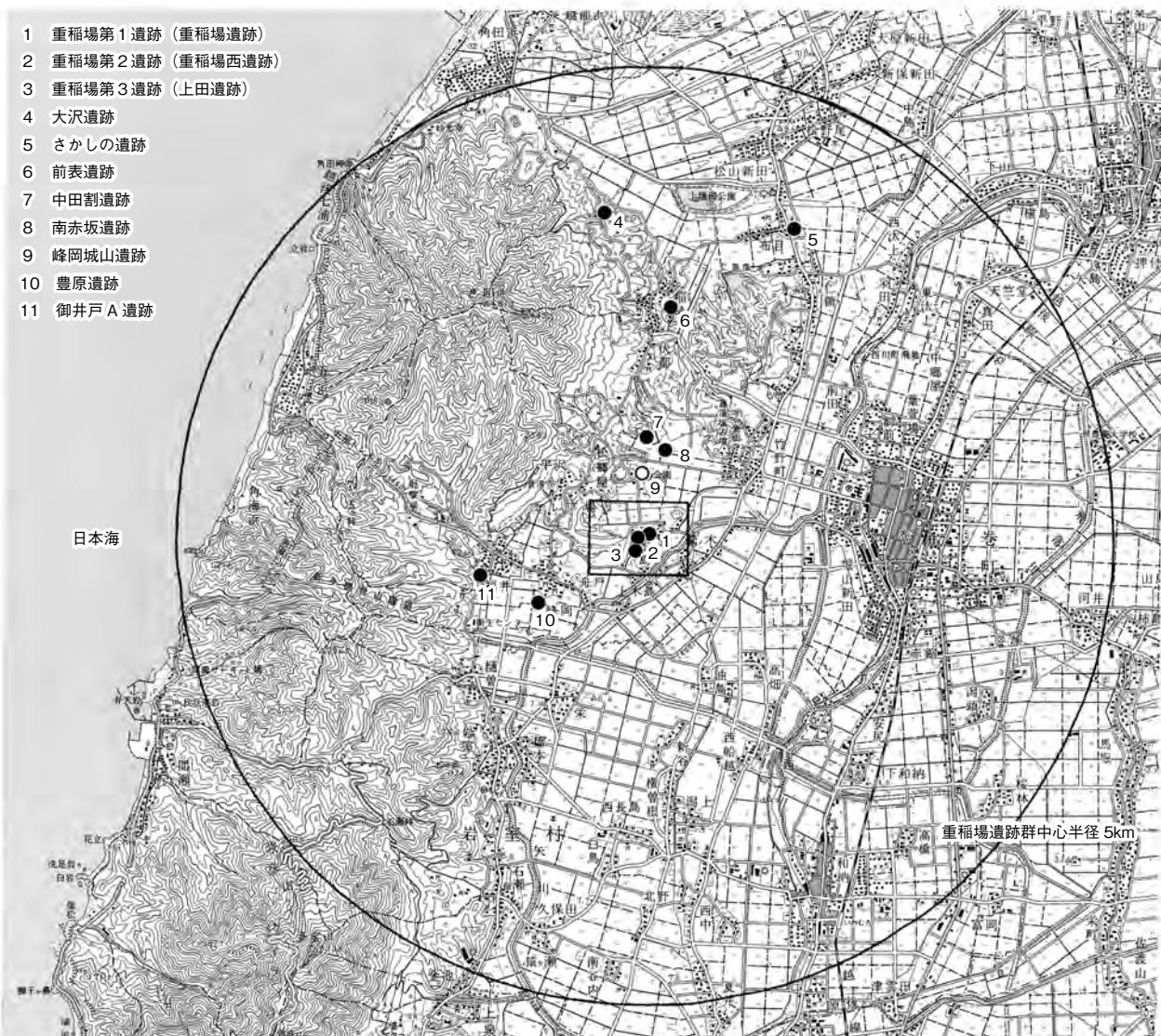


図1 繩文時代前期終末（真脇式～朝日下層式期）の遺跡（●）と峰岡城山遺跡（○）の位置

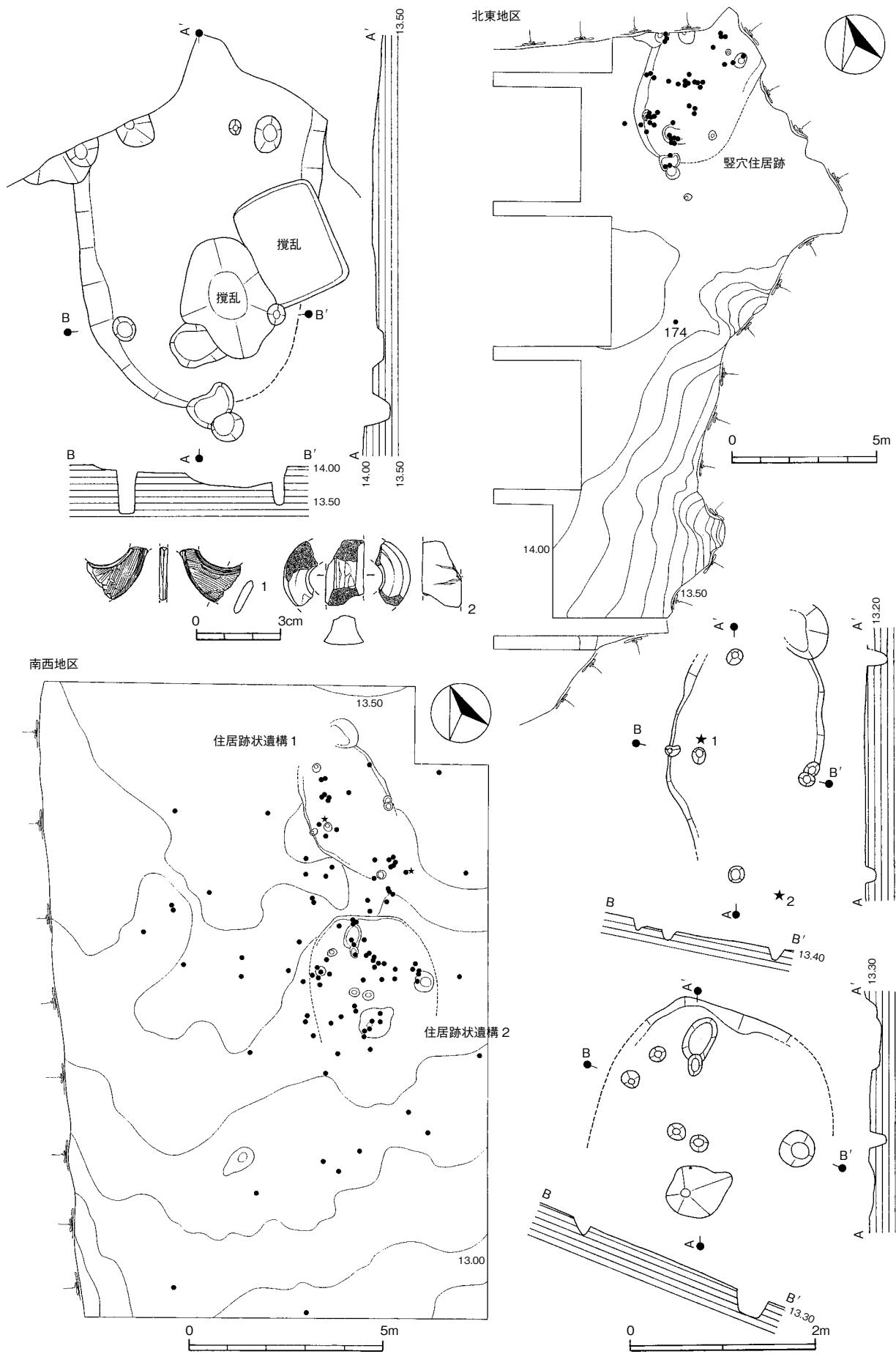


図2 重稻場第3遺跡（上田遺跡）の遺構と掲載土器・装身具の出土地

(第2図左上)。南西地区の堅穴住居跡状遺構は、ともに浅い落込で、明確な柱穴や炉跡の確認には至らなかつた。北側の遺構1は、長軸4m前後・短軸2.3mの楕円形をなす。遺構2の全体形は不明であるが、海拔13.2mラインに認める緩やかな窪みを南端部と見なした場合、北東地区と類似規模の楕円形住居の可能性がある(第2図右下)。

北東地区からは、堅穴住居跡内を中心に93個体以上の前期終末土器と石鏃3点、磨石・敲石類3点、石皿1点、砥石6点、石核・剥片類799点が出土しており、第2図右上に本稿掲載土器の出土位置を示す。南西地区からは堅穴住居跡状遺構の周辺を中心に414個体以上の前期終末土器と石鏃7点、礫石錐3点、打製石斧1点、磨石・敲石類10点、石皿3点、石錐7点、砥石4点、石核・剥片類1928点、「の」字状石製品1点(第2図1)、土製玦状耳飾1点(同図2)が出土した。土製玦状耳飾は中間部破片で、角田山麓では所属時期が前期終末に特定できる唯一の資料である。同図左下に「の」字状石製品・土製玦状耳飾と本稿掲載土器の出土位置を示す。以上のような出土遺物の他に南西地区隣接地から磨製石斧1点が採集されており、当該期の集落における基本的な用具を網羅する内容となっている。

(3) 前期終末土器

A 重稻場遺跡群の土器

第3図～5図に出土・採集地が明らかな294点を示す。新潟市文化財センターが所蔵する第1遺跡採集資料と第3遺跡出土・採集資料については、未報告資料96点を加えて新たに図化した。巻町史掲載資料の中には器形などにいくつかの誤認があったため、本稿ではこれを修正した。

重稻場遺跡群の前期終末土器は、地区によって様相が異なる。筆者はこれを時期差と見なし、第1遺跡の主要部分を十三菩提式中葉のI群土器、第3遺跡南西地区出土資料を後葉古段階のII群土器とした[前山1995]。北陸編年に照らせば、前者は「真脇式」、後者は「朝日下層式」の古段階にあたるものである。

巻町史編纂から四半世紀以上が経過した中で、本遺跡群を取り巻く状況は大きく変化した。とりわけ第1遺跡の北1kmに位置する南赤坂遺跡で1993年に行った発掘調査において多量の前期終末土器が出土し、重稻場遺跡群の位置づけにあたり重要な知見がえられた。本遺跡群や南赤坂遺跡の前期終末土器については広域的な視点に基づく今村啓爾氏の論考[今村2006b]があり、これをふまえながら重稻場遺跡群の土器を再検討する中で、I群土器とII群土器がそれぞれ新旧二段階に区分できると考

えるに至った。

本遺跡群の土器は、大半が小破片によって占められる。そのため分類は文様に基づき、粘土紐貼付による浮線文を1類、浮線文と竹管沈線文を複合する2類、竹管沈線文に限定される3類、口縁部に隆帯・肥厚帯・沈線文・刺突文を施す4類、縄文のみの5類に区分する。このうち量的主体を占める1類・3類と土器含有物の特徴を個別資料の記述に先立ち以下に記す。

1類土器の施文手法はバラエティーに富んでおり、粘土紐に竹管工具の腹面を押し当て連続的な刺突を加えるA種(結節状浮線文)、粘土紐を竹管腹面で押し引くB種、粘土紐の裾に竹管工具の背面をなぞるC種、ソーメン状の粘土紐を貼付するD種、指頭によって粘土紐を成形するE種に大別できる。A種については、刺突角度が器面に対し鋭角的なA1種と鈍角的なA2種に区分する。後者は東北地方南部の大木式土器に特徴的な施文手法で、福島県法正尻遺跡[福島県教委ほか1991]や阿賀野川流域の猿額遺跡[新潟県教委1995]などで類例が出土している。D種については直線・曲線的に貼付するD1種と環状をなすD2種に細分する。後者は「チューブ・デコレーション」の可能性を指摘した資料である[前山・龍田2017]。

1類は施文法が時期的に変化する。太さ3～4mmのA1種はI群土器、B種・C種・D2種はII群土器の指標となる。B種とC種については、施文部位を断面図もしくは拓本に示した。●はB種、○はC種を表す。D1種による「波状浮線文」はI群土器、「鋸歯状浮線文」はII群土器を特徴づける文様である。南赤坂遺跡での知見に基づけば、浮線A1種に太目の粘土紐を並走させるもの、浮線A種による菱形文、波状口縁の中間部が緩やかに内折するもの、浮線E種はI群土器の中でも新段階の資料と見なされる。浮線文土器の多くは縄文を地文とする。その在り方はI群・II群で異なり、前者は横位施文の単節斜縄文が卓越する。後者は縦位施文の結束羽状縄文を多用し、II群新段階に至り木目状撚糸文が付随するようになる。

3類の中には前期終末前葉の「鍋屋町系土器」が含まれるが、主体をなすのは集合沈線文や竹管沈線文を施す「池田系土器」・「松原系土器」である[今村2006a]。このうち異方向の竹管沈線を集合施文するものや連続山形文はI群～II群古段階、格子目文やV字文はII群新段階の指標となる。

土器の含有物はバラエティーに富んでおり、ここでは次の3種に大別する。磨耗または破碎した多種にわたる岩石粒子と共に微細な石英を概して多く含むA種、破碎

した凝灰岩を多量に含むB種、石英の粗大な破碎粒子を多量に含むC種の別である。第3図～6図掲載資料の番号末尾には、A種を●、B種を○、C種を◎で示した。三者の中で主体を占めるのはA種である。その在り方は角田山麓の沢砂と特徴を異にし、現在の信濃川下流域の川砂と類似する。遺跡形成当時角田山の東麓付近に流れた旧信濃川またはその分流から採取した可能性を指摘したい。4類・5類の中には植物纖維を含む資料が見られる。角田山麓の豊原遺跡〔小野・前山ほか1987〕、南赤坂遺跡〔巻町教委2002〕や新発田市二夕子沢A遺跡〔新発田市教委2004〕の東北南部系土器に類例が確認されており、該当資料の断面図を網点で示す。このほか、微細な土器破片や黒曜石を含むものもあり、掲載番号末尾に前者を□、後者を★で示す。なお、実測図内の砂目は破損部位を表す。

①第1遺跡（重稻場遺跡）南部地区

150個体以上の前期終末土器が採集されており、第3図1～第4図102に主要資料を示す。このうち33点を新たに提示した。本地区採集資料は重稻場遺跡群の成立期から終末段階までの土器からなるが、I群古段階の資料が大半を占める。

1類（第3図1～45）

全体の60%あまりを占める主体グループである。I群古段階を主とし、これに若干のII群土器が付随する。

1～33・39～42はI群土器。1～19は幅3mmほどの浮線A1種を数条一単位で密集させ、山形・弧状・環状などの帶状文様を描く。1～6は正面形が台形をなした「裁頭波状口縁土器」。巻町史で器形を誤認していたため、図のように訂正する。1～3は筒状に作出された頂部資料で、3はその内面にあたる。4～6は中間部の内折口縁。4は波頂部付近の資料で、上端に透かしの一部が残る。17は中空に作出された突起が粘土帯で剥落する資料。三角形や橢円形の透かしと橢円形の彫去が施されており、前者を網点で示す。

20～31は浮線A1種を等間隔または単一に施す。このうち23は西日本的な色彩を認める資料である。24～31は、これに接して浮線D1種による波状文を配す。39～42は、浮線D1種のみで文様を描くグループで、39は裁頭波状口縁の中間部、41は注口と透かしをもつ。以上はI群古段階の浮線文土器を代表する資料となる。このほか、浮線A1種を菱形風に配す33は、I群新段階に属す可能性が高い。これらの資料は横位施文による単節斜繩文を地文とするケースが一般的で、繩文欠落個体（19・32）は少数例にとどまる。

以下の7資料は、本地区で数少ないII群土器である。

34は幅2mm弱の浮線A1種を帯状の横位文様下に等間隔に垂下させる。35～38は、浮線A1種による区画内に斜行格子目浮線文や鋸歯状浮線文を施す。35の鋸歯状文は、浮線B種による。43は球胴形土器の頸部に橋状把手を配し、把手に横位、把手下に鋸歯状浮線文を施す。44は粘土紐が剥落するが、浮線B種によってV字文が描かれる。45の球胴形土器は、波状口縁の中間部資料。南赤坂遺跡の第8図97などに類似した橋状突起をもち、突起上の口端に二つの珠文、口縁部区画内に縦位の浮線C種を密集施文する。

2類（第3図46・47）

図示した2点のみで、ともにII群に属す資料である。球胴器形をなす46は、肥厚する口端に浮線C種を密に施し、口縁部の横位区画内に竹管集合沈線を充填する。47は縦位の竹管集合沈線下に短い粘土紐を斜位に貼付し、下端の竹管沈線上に連続的な刺突を加える。

3類（第3図48～70）

全体の30%あまりにとどまり、本遺跡群の中では最も占有率が低い点が特徴である。48・49は結節状沈線文と鋸歯状の三角形彫去を複合する鍋屋町系土器。本遺跡群において最も古様相を認める資料である。

50～58は集合沈線文を施し本地区の主体をなすグループで、I群古段階に属す資料と考えられる。50は南赤坂遺跡の第7図31に類似した突起をもつ。各資料は横位区画内に斜位や縦位沈線を施すものが一般的であるが、斜位や弧状の集合沈線を異方向に密接させ、水平感に欠ける58のような例も見られる。57は微細な土器片（シャモット）を多量に含む。

64～68は繩文を地文とし竹管沈線を施すグループで、本地区では連続山形文施文例が多い傾向にある。地文はいずれも横位施文によっており、65は結節羽状繩文、66は端部に結節をもった斜繩文を施す。これらはI群古段階～II群古段階までの資料と考えられる。

59～63はII群段階の資料である。59は球胴形土器の頸部に配した橋状把手が剥落したもの。把手に横位の竹管沈線を密に施し、下端に橢円形突起を付す。60～63は集合沈線上に浅い沈線を加えた格子目文土器。いずれも格子目文を施した後、横位・斜位・弧状の竹管平行沈線を加える。

68～70は、上記グループとは特徴を異にする土器である。68は無文帶の下端に单沈線と竹管沈線、69はラフなタッチで竹管集合沈線を施す。70は单沈線によって帶状文様を描く唯一の例であるが、便宜的に本類に含めた。

4類（第4図71～83）

本類は当地区に限定されており、主としてI群古段階

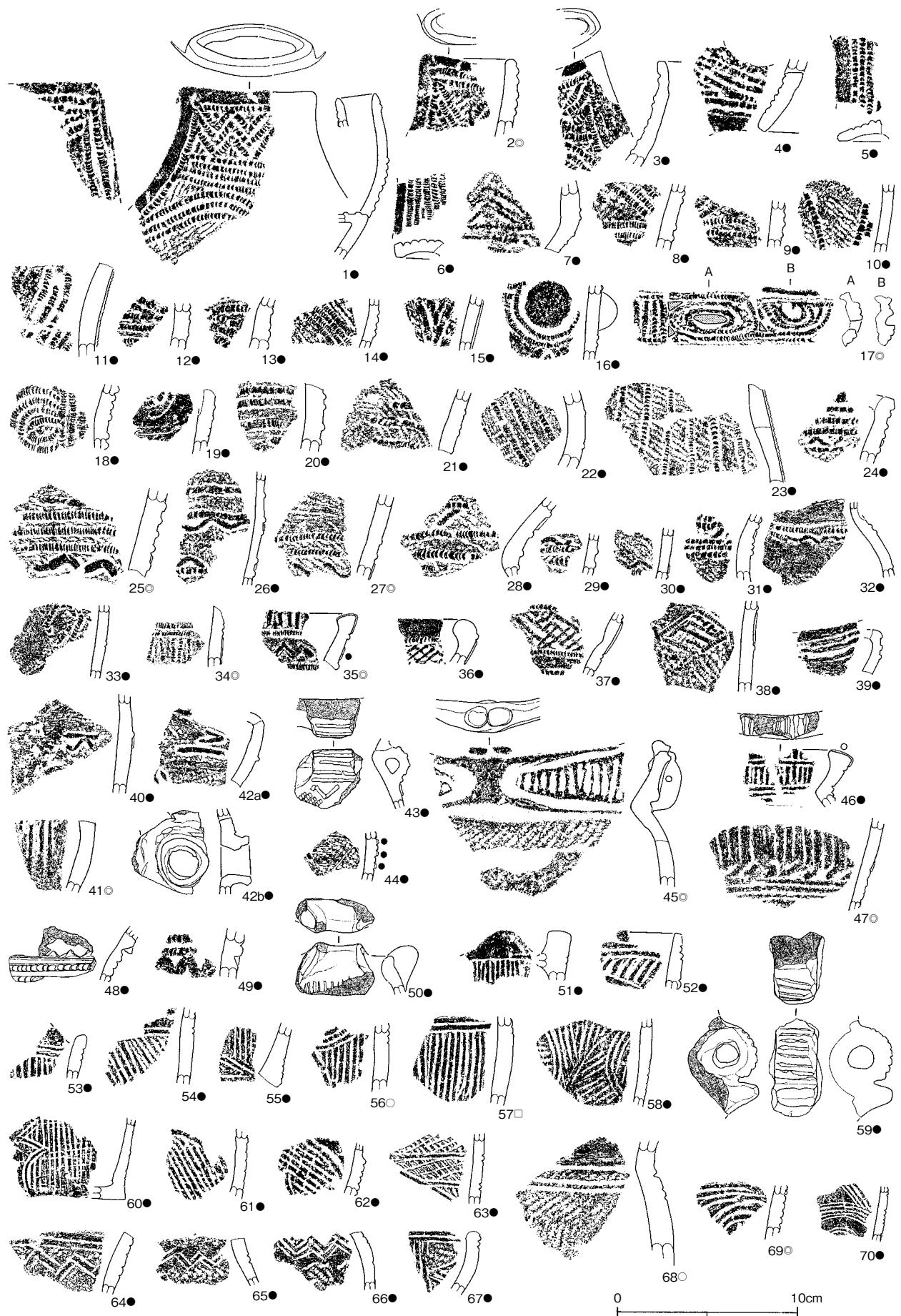


図3 重稻場第1遺跡（重稻場遺跡）南部地区の土器

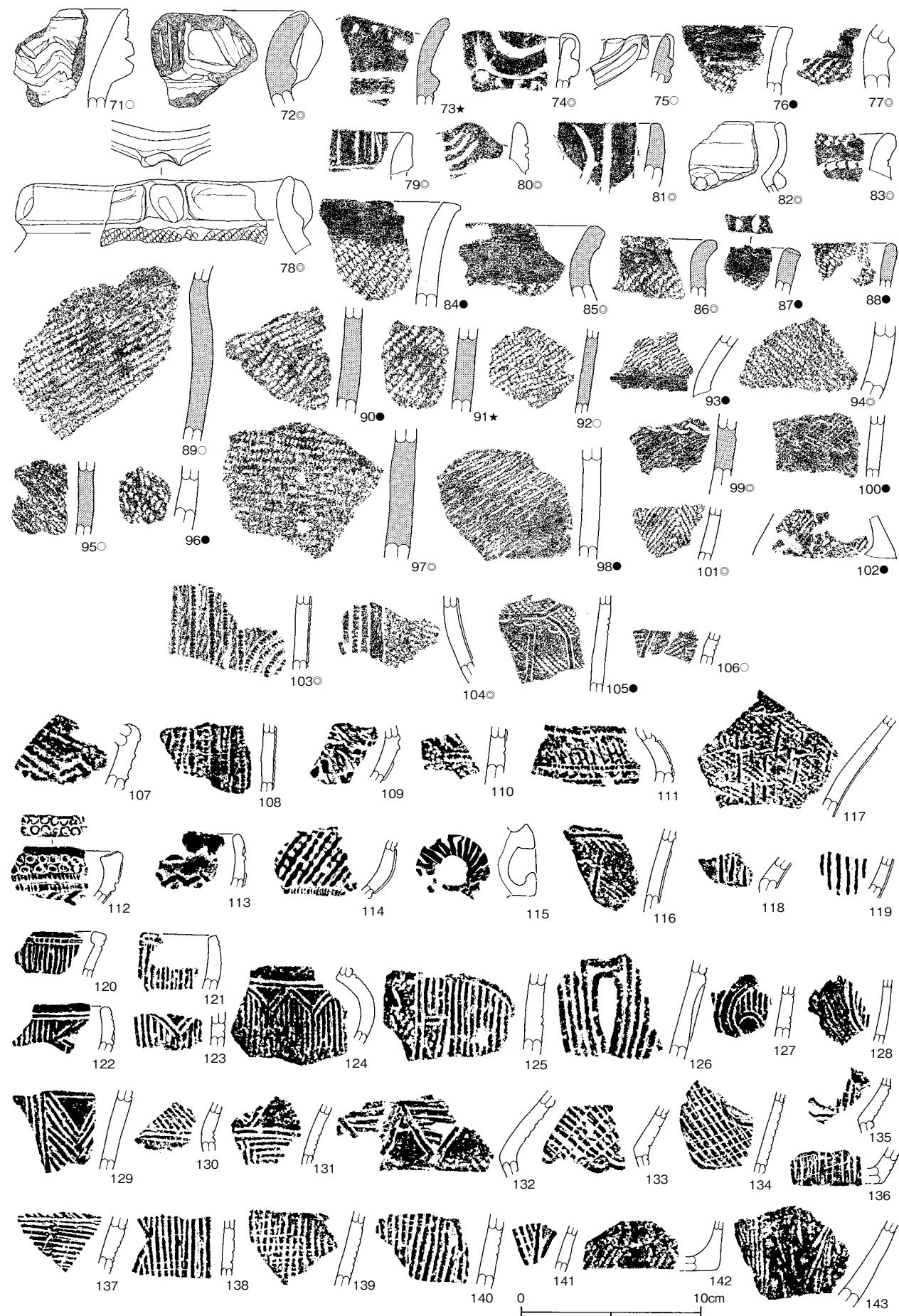


図4 重稻場第1遺跡（重稻場遺跡）南部地区・北部地区と第2遺跡（重稻場西遺跡）の土器

の一部を構成する土器と見なされる。

71~82は、東北南部的な色彩をもつ在地土器である。71~78は隆帯文を配し、その形状から3種に区分できる。71・72は太い隆帯を配すもので、前期終末前葉に遡る資料である。前者は鋸歯状をなした隆帯にラフなタッチの単沈線、後者は垂下降帯に3条の浅い凹線が観察できる。73~75の隆帯は丸味を帯びる。73は波状口縁の無文帶下、74・75は口端に隆帯を配し、75の隆帯上に単沈線、73の口端と74の隆帯下に刺突文を施す。75の内面には、擦痕が顕著に残る。76~78は中央に綾をもつ小隆帯を無文帶下にめぐらす。隆帯下にはいずれも単節縄文を横位施文する。79~81は口縁部の肥厚帯などに縦位や弧状の単沈線を施す。82は口縁部に無文帶を設ける球胴形土器で、頸部に円形突起を配す。以上の中で、72・73・75・81の器壁内外面には粗大な植物纖維痕が観察できる。

83は単節縄文を付した口端下に無文帶を設け、一列の刺突文を施す。前期後葉の「刈羽式」の系譜を引く在地土器で、前期終末前葉に遡る可能性がある。

5類（第4図84~88）

口端が遺存する5点を示す。いずれも単節原体LRを横位施文し、84~87の口縁部には幅広い無文帶を配す。このうち端部に刻目を加える87は、内面に斜位の擦痕が顕著に残る。85~88は植物纖維を含む。

体部縄文（第4図89~102）

89~95・99は横位施文による単節斜縄文で、本地区の大多数を占める。使用原体は、89~93・99がLR、94・95がRL。93は台付土器の体部下端にあたる。96は複節原体、98は「直前段反撫」原体を用いる。97はLR原体を斜位施文し、雲母を多量に含む異質な土器である。以上の中で、89~92・95・97・99は植物纖維を含み、4類もしくは5類の体部資料と見られる。91は微細な黒曜石を多量に含む。粉碎した黒曜石を混和材として利用した資料である。

101・102は縦位施文による結束羽状縄文で、後者は両端に結節をもつ。横位施文による100も結節をもち、結束原体を使用する可能性が高い。これら3点は、II群土器と特定できる数少ない資料である。102は台付土器の下端部にあたる。

②第1遺跡（重稻場遺跡）北部地区

第4図103~106に示す4点が総てで、104を新たに図示した。資料数は少ないものの、I群古段階からII群新段階までの期間にわたる点が特徴である。

1類（第4図103・104）

103・104は横位施文による単節斜縄文上に浮線A1種を施す。前者は等間隔に縦位や曲線的に配し、後者は縦

位の帶状浮線文に太目の粘土紐を添える。前者はI群古段階、後者はI群新段階の土器である。

3類（第4図105・106）

105は結節を付したLR原体を横位施文した後、竹管沈線を縦位・横位・弧状に施す。106は竹管集合沈線によってV字文を描くII群新段階の土器である。

③第2遺跡（重稻場西遺跡）

51個体以上が採集されている。第4図107~143に卷町史掲載資料の中から37点を再掲した。本遺跡採集資料は、大半がII群新段階に属す。分類別に見た出現率は3類が主体を占め、後述の第3遺跡南西地区に類似する。詳細は卷町史に譲り、概略のみを記す。

1類（第4図107~119）

107・108は浮線A1種を帶状または密集施文するもので、本遺跡の中では数少ないI群土器となる。前者は裁頭波状口縁の中間部で、連続山形文を描くI群古段階の資料。

109~119は、いずれもII群土器の特徴を備える。109~111・113は浮線D1種による鋸歯状文、111・114は斜行格子目文、112は浮線D2種を施す。115は円形突起上、117~119は体部に浮線D1種を密集もしくは等間隔に垂下させる。以上のようなII群土器の中で、浮線B種やC種が本遺跡で欠落する点は留意すべき特徴と言える。

3類（第4図120~141）

本遺跡の3類土器は、いずれも竹管集合沈線文を施す。120~132は集合沈線文、133~141は斜行格子目または格子目文を施すグループ。前者の中には、山形文を複合する122~124やV字文を施す131・132が定量存在する。第1遺跡（重稻場遺跡）南部地区や後述の第3遺跡（上田遺跡）北東地区に見られる連続山形文施文資料が欠落する点も第3遺跡南西地区に類似した様相と言える。

体部縄文（第4図142・143）

142は結束羽状縄文、143は木目状撫糸文を縦位に施す。ともにII群土器にあたり、後者は本遺跡と第3遺跡南部地区に限定される。143は単軸に一孔を穿ち、二本の縄を深く挿入した後左右同一方向に巻くもので、新潟県内の前期終末から中期初頭における最も一般的な木目状撫糸文原体である。

④第3遺跡（上田遺跡）北東地区

93個体以上の前期終末土器が出土しており、第5図144~189に46点を示した。このうち22点は新たに提示する資料である。174以外は堅穴住居跡覆土とその周辺から出土した。本地區出土土器は大半がII群に属すが、第2遺跡（重稻場西遺跡）や第3遺跡（上田遺跡）南西地区に較べ第1遺跡南部地区に近似する要素も見られ、II群

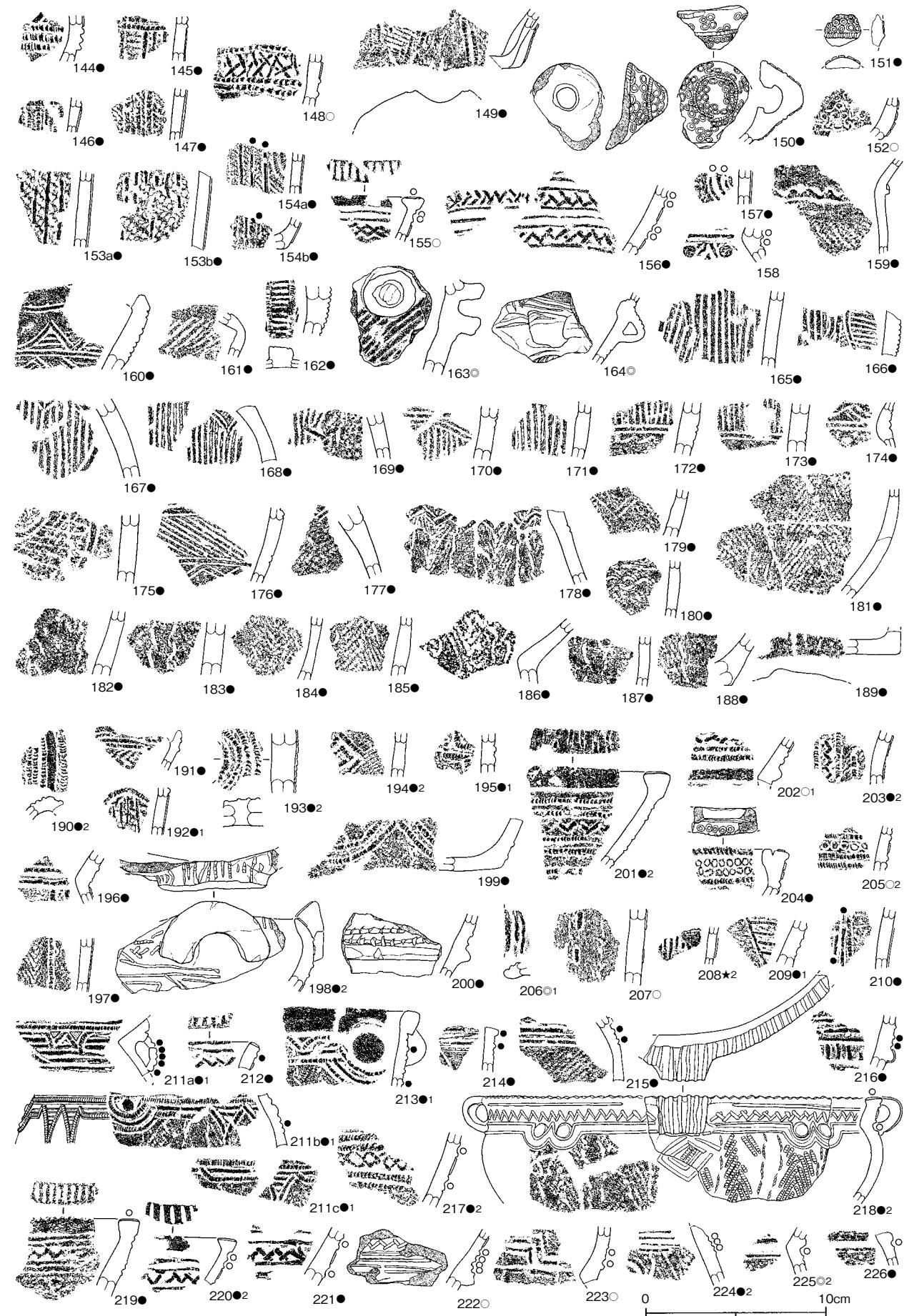


図5 重稻場第3遺跡（上田遺跡）北東地区・南西地区的土器

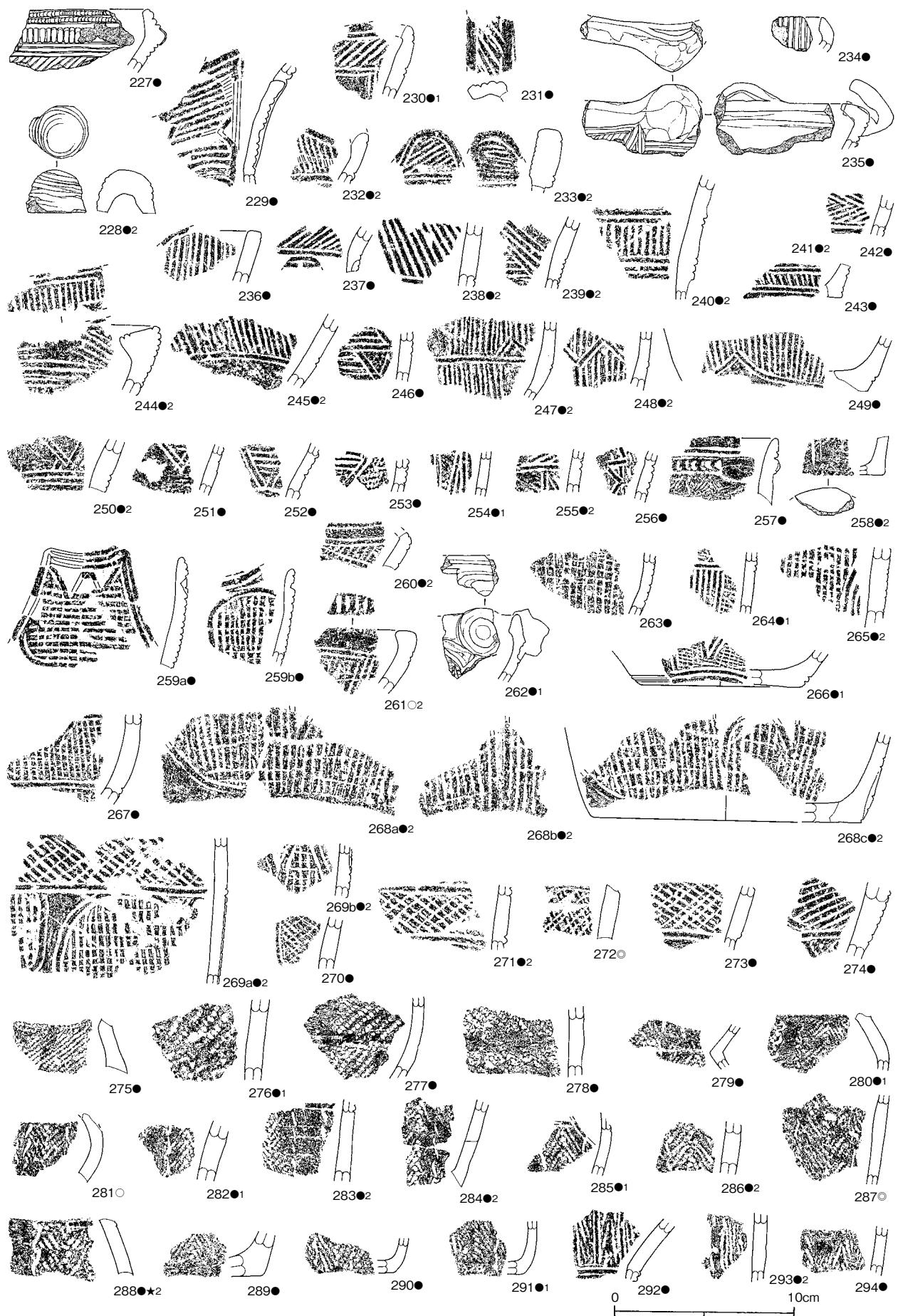


図6 重稻場第3遺跡（上田遺跡）南西地区の土器

古段階の設定を可能にさせる資料となる。

1類（第5図144～159）

144は帯状をなした浮線A1種に波状文と見られるD1種を複合する。本地区の中ではI群古段階に属す可能性が高い数少ない資料である。159は浮線E種に該当する唯一の例で、I群新段階に属す。

145～152は、浮線A1種を文様要素とするII群土器。145～147・149は、やや間隔をおいて懸垂状または縦位に施文する。このうち149は、体部下端に浅い抉りを施す西日本的な土器である。148はA1種による横位区画内に浮線斜行格子目文をラフなタッチで充填する。150～152はD2種を複合施文する。口縁部資料の150は円錐形をなした突起全面に環状浮線文を貼付し、内面には円形の抉りを施す。153は単節斜行縄文を地文とし、D1種を等間隔に垂下させる。

154は浮線B種に該当する本地区唯一の資料で、A1種による弧状文とD1種による等間隔の縦位浮線文を複合する。155～158はC種を文様要素とする。155・156はC種による横位区画内に浮線菱形文や不整形な鋸歯状文を充填する。前者は口端が前後に張り出し、端部にC種を密に施す。158は第3遺跡（上田遺跡）南西地区の第5図218に類似した珠文を配す。

3類（第5図160～179）

本地区的3類は第2遺跡（重稻場西遺跡）や第3遺跡（上田遺跡）南西地区に較べ占有率が下回り、第1遺跡（重稻場遺跡）南部地区に近い数値を示す。

160・161は、裁頭波状口縁の中間部。前者は口縁部無文帶にV字文を逆位に描く。161は緩やかに内屈する資料である。162は橋状把手の一部。結節状沈線文で縁取られた把手手上に集合沈線を施し、把手下には斜位の竹管集合沈線が観察できる。163はドーナツ状の突起、164は橋状の小把手を配す。165・166は弧状沈線を境にして複数方向の集合沈線を施し、第1遺跡南部地区の第4図58に似た図柄をもつ。167～173は、縦位主体の竹管集合沈線文を施す。このうち167・168はV字文を複合する。175は弧状をなした区画内に斜行格子目文を充填する本地区唯一の資料である。

176～179は、文様帶の下端に連続山形文を施す。第1遺跡南部地区に類例があり、本地区を特徴づける資料となる。縄文を地文とする177・178はともに結束羽状縄文を施し、前者は横位・後者は縦位施文する。

体部縄文（第5図180～189）

181～189は、端部に結節を付した結束羽状原体を縦位施文する。このうち189の体部下端には、149に類した抉りの一部が観察できる。横位施文による180は端部に結

節をもち、結節羽状縄文の可能性がある。

⑤第3遺跡（上田遺跡）南西地区

豎穴住居跡状遺構周辺を中心に414点以上の前期終末土器が出土しており、第5図190～226と第6図227～294に105点を示す。うち41点は新たに提示するものである。本地区出土土器は、第2遺跡とともにII群新段階の指標となる。資料番号末尾に示す1・2は、豎穴住居跡状遺構1・2の別を表す。

1類（第5図190～226・第6図288）

190～195は浮線A1種のみを施すグループで、本地区の中では古様相を認める資料である。190・191は裁頭波状口縁の中間部。前者は緩やかに屈曲し、A1種を帶状に施す。後者もこれに類した浮線文を施すが、横位施文による結束羽状縄文を地文とする。193は帶状の弧状文を施す。194～197・199は、2ないし1条のA1種によって菱形文（194）・クランク文（195）・懸垂文（196）・弧状文（199）を描く。このうち197・199は、縦位施文による端部結節付結束羽状縄文を地文とする。以上はI群新段階に属す資料と考えられる。

201～205は浮線A1種とD種を複合するグループである。201～203はA1種に沿って浮線鋸歯状文を施す。このうち201は内面に張り出す口端上にD1種を等間隔に貼付する。204・205はD2種を口縁部に充填し、前者は沈線を加えた口端上にも同種の浮線文を貼付する。

198・200・217は、浮線A2種に該当する数少ない資料である。前者は弧状をなした突起上面の縦位文様と突起下の横位文様にA2種による極細の浮線文、口縁部区画内の鋸歯状文や体部文様にD1種を用いる。217はA2種による浮線文の裾を竹管背面でなぞる。本遺跡群唯一の資料であるが後述の南赤坂遺跡に類例があり（第8図92～95・97～99）、横位の浮線間にD1種による菱形文を充填する。222は2条のA2種を横位施文し、その下に断面三角形をなした隆帶を配す。

206～209は、D1種に限定される可能性があるグループ。206は裁頭波状口縁土器の中間部資料で、内屈口縁の端部に横位浮線を施す。209はV字文、207・208は1ないし数条の垂下浮線を配す資料で、いずれもII群に属す。

210～216は浮線B種を文様要素とするグループで、本遺跡群の中で最もまとまった量が出土した。施文部位は、A1種に接した横位または弧状浮線に限定されるケースが多い。213は口端の無文帶下に大きな円形突起、211は球胴器形の頸部に中空の突起を配し、後者の突起下には珠文や浮線V字文を施す。ともに結節付結束羽状縄文を体部に施す資料である。212は口端下の横位浮線

にB種を用い、鋸歯状文や口端の縦位浮線にD1種を配す。216はB種による横位浮線下に隆帯を設け、縦位のB種浮線文を貼付する。214はB種によってV字文を描く資料である。

217~226は浮線C種を用いるグループである。上記のB種とともに、本地区の1類を特徴づける文様となる。施文部位は、D1種による鋸歯状文以外の文様全般にわたる。218は上部文様全体がうかがえる球胴形土器。橋状把手と中間部の珠文が特徴的である。223はC種によってクランク文を施し、I群新段階のA1種(194)からII群土器への移行過程が理解できる資料となる。220の口端文様は竹管工具の背面を用いた沈線文で、粘土紐の貼付を省略したケースと言える。以上の中で、218・223・224の体部には端部に結節を付した羽状縄文を縦位施文する。

2類(第6図227)

227は断面「く」の字状の口縁部に浮線D1種と集合沈線を複合する本遺跡群唯一の資料である。口端の結節状沈線文下に縦位の浮線D1種を密集施文し、それ以下に斜位の集合沈線を施す。

3類(第6図228~274・283・285・292)

本地区的主体を占めるグループで、63%の占有率を示す。大半がII群新段階にあたる資料と考えられる。

228~249は竹管集合沈線文土器。229~232は裁頭波状口縁土器。229は波頂部付近、230~232は中間部にあたり、いずれも区画内に斜位の集合沈線を施す。229は外反器形をなした数少ない例で、竹管沈線で縁取られた三角形彫去文を区画沈線に沿って配す。233は内面がいく分肥厚した半円形突起をもつ。外面に斜位、内面に横位の集合沈線を施す。234・235は口端が「く」の字に内屈し、後者の端部には内面に抉りを加えた円形突起を付す。244は口端が内側に肥厚し、平坦な端部に縦位の集合沈線を施す。228は中空に作出された円形突起が粘土帶から剥落した資料である。これらの体部には、横位や弧状の区画内に縦位集合沈線を施すものが多い。この他少数資料ではあるが、矢羽根状の242や逆位のV字状文に似た246のような例も見られる。

259~274は格子目文または斜行格子目文を施す。259・260は裁頭波状口縁土器で、259aは波頂部、259bはその下端、260は中間部にあたる。前者は竹管沈線に縁取られた三角形彫去文を波頂の上下に配し、波頂部や体部の弧状の区画内に格子目文を施す。261・262は、内湾ぎみに立ち上がり、口端内面が肥厚する。前者の端部には1類220と似た竹管背面沈線を施し、後者には円錐形の突起が配される。体部の文様は、横位または弧状を

なした区画沈線内に格子目文や斜行格子目文を施し、各所に彫去を配す資料(259・266・268・269)が多い。

253~258・283・285・292は縄文を伴うもので、類似文様をもった小破片の250~252も便宜的にこのグループとして扱う。257は唯一の口縁部資料。口端下に竹管沈線と隆帯を配し、後者に刺突文を加える。254~256・258は、縦位・斜位の竹管沈線を施す。底部破片の258は、体部下端に第3遺跡北東地区149・189と同様の抉りを加える。250~253はV字文を配施す。後続の新保式に受け継がれる要素であり、本遺跡群最終段階の土器を特徴づける資料となる。

体部縄文(第6図275~294)

275~277は単節LR、278はRLを横位施文し、277・278は端部に結節を付す。275は台付土器の下端部。279~291は端部に結節を付した結束羽状縄文原体を縦位施文する。北東地区と同様に、本地区的主体を占める地文である。292~294は木目状撚糸文。292・294は単軸に穿った二孔にそれぞれ2本のLを挿入し同一方向に巻くもので、北陸~新潟では最も古い原体にあたる。293は第4図143と同類の原体であるが、左右異方向に巻く少数資料にあたる。

B 土器から見た角田山麓の前期終末遺跡群

重稲場遺跡群の前期終末土器は、新潟県内における当該期の標識資料と位置づけられている〔寺崎1999・2019、金子1996〕。小破片が大半を占めるという資料的な制約はあるものの、本稿によって全容が提示できたものと考えている。前項で述べたように、第1遺跡(重稲場遺跡)の南部地区では前期終末前葉に遡る資料が存在する。しかしその量は限定されており、今回の再検討をつうじ前期終末中葉から後葉初期までの短期間に営まれた集落跡であることが確認できた。遺跡群の形成過程を見ると、集落成立期にあたるI群古段階では第1遺跡南部地区を中心をもつ。I群新段階に至り土器量は一時的に減少するが、第1遺跡(重稲場遺跡)の大半が既に失われる点を考慮すれば、ひき続き集落が存続していたことも考えられる。後葉に入ると、第2遺跡(重稲場西遺跡)と第3遺跡(上田遺跡)で土器量が急増する。二遺跡には若干の時期差があり、第3遺跡(上田遺跡)北東地区はII群古段階、第2遺跡(重稲場西遺跡)と第3遺跡(上田遺跡)南西地区は同新段階を主体とする。本遺跡群は全期間をつうじ北陸系土器が卓越し、東北南部系土器は客体的な存在にとどまる点が特徴である。

角田山麓では、本遺跡群の南西1.4kmに位置する豊原遺跡〔小野・前山ほか1989〕と北1kmに位置する南赤坂遺跡〔卷町教委2002〕から多量の前期終末土器が出土して

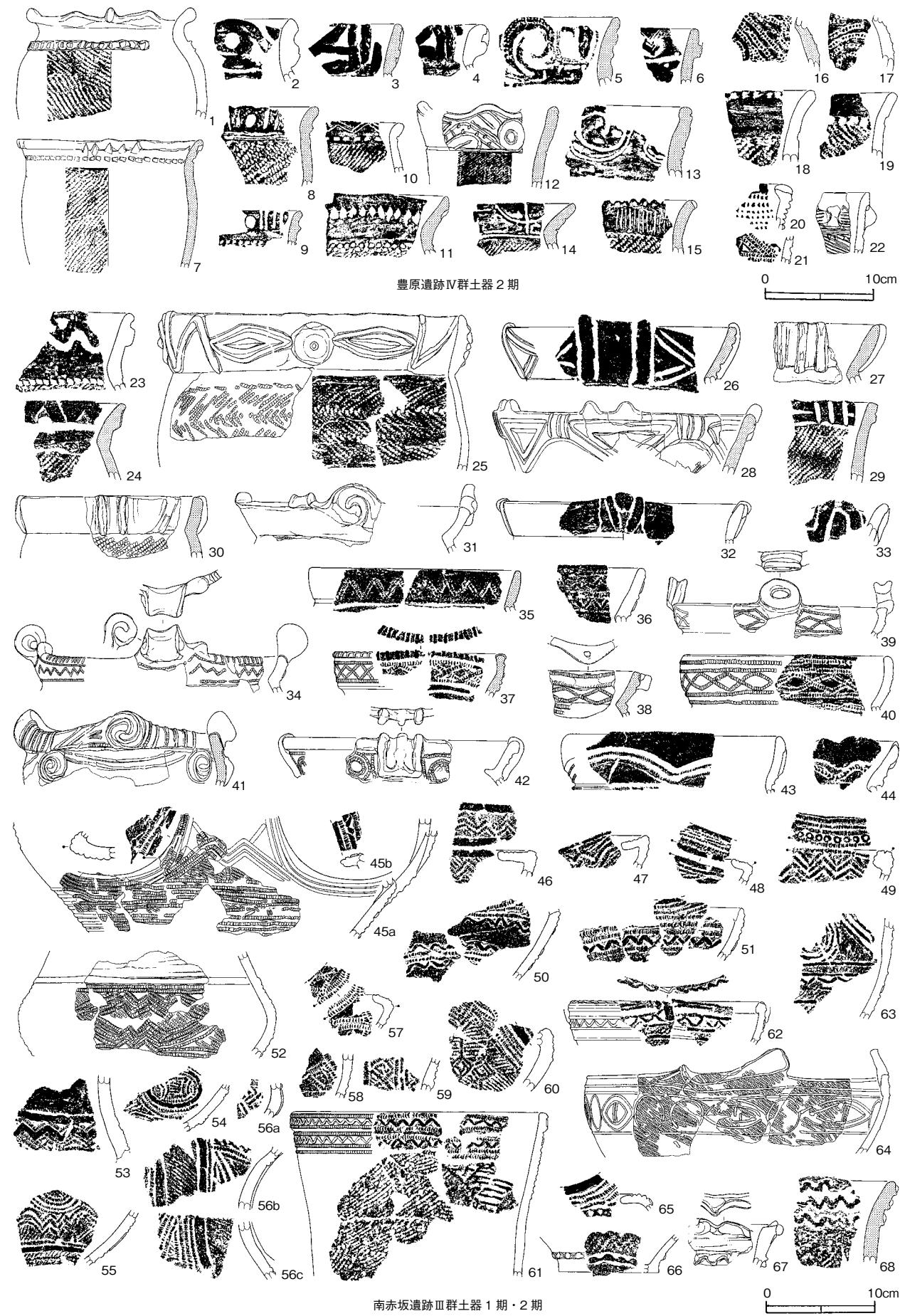
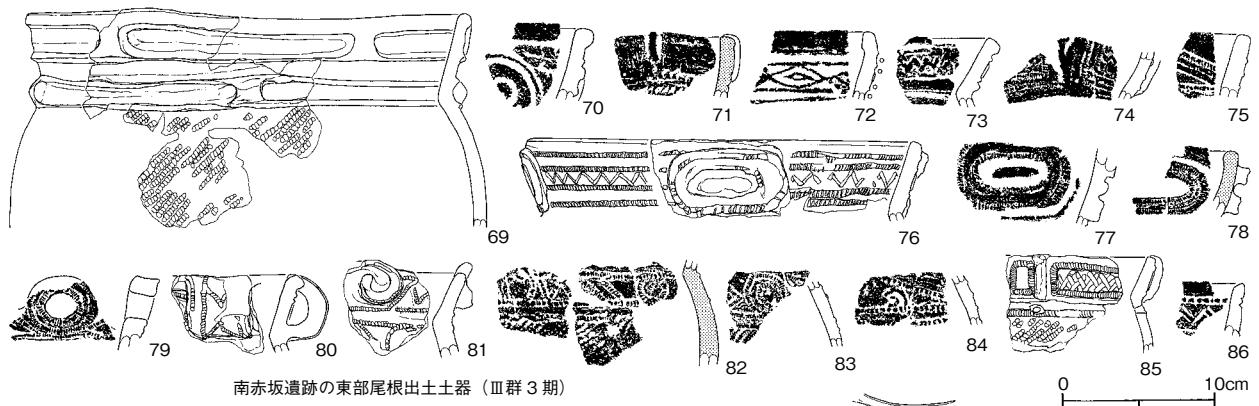
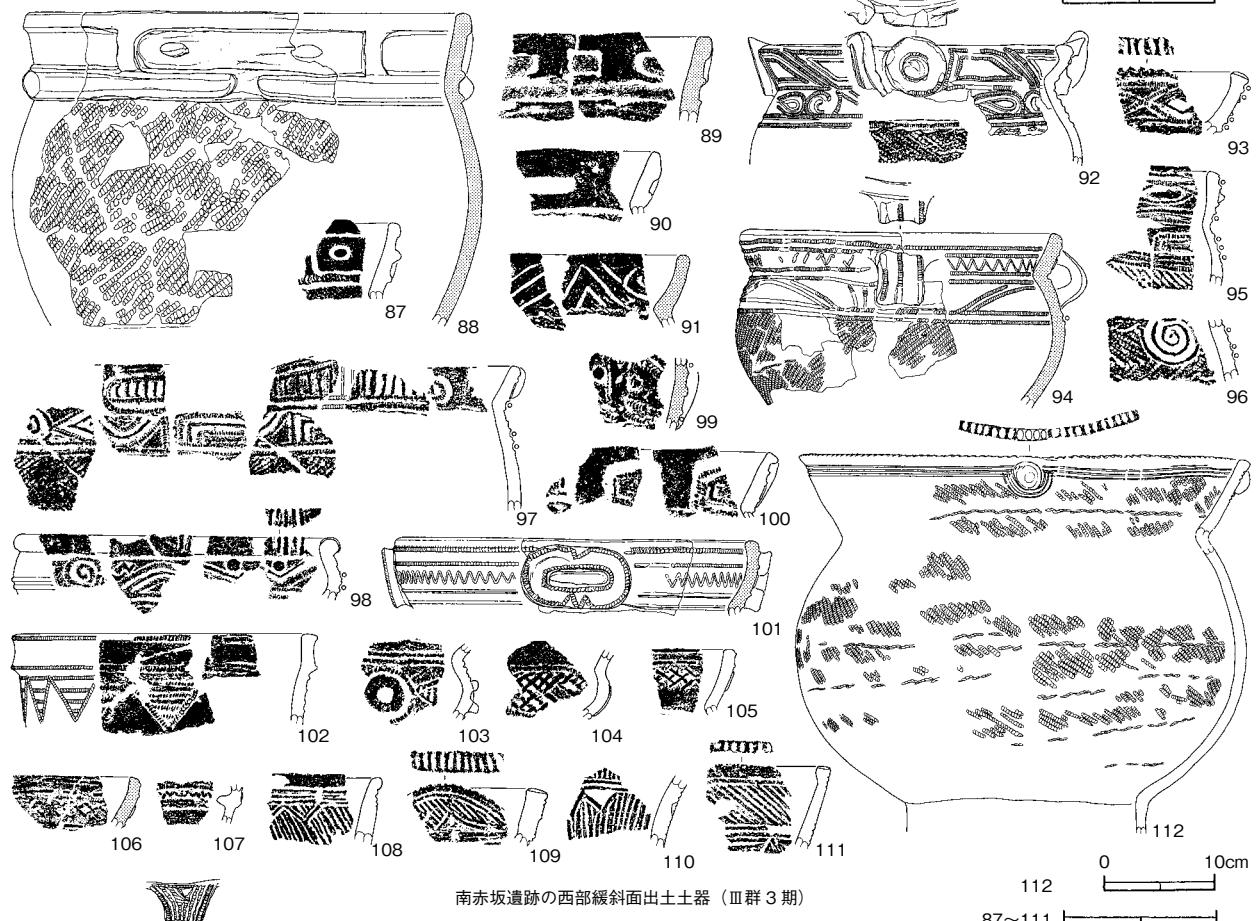


図7 豊原遺跡・南赤坂遺跡の前期終末前葉～中葉土器



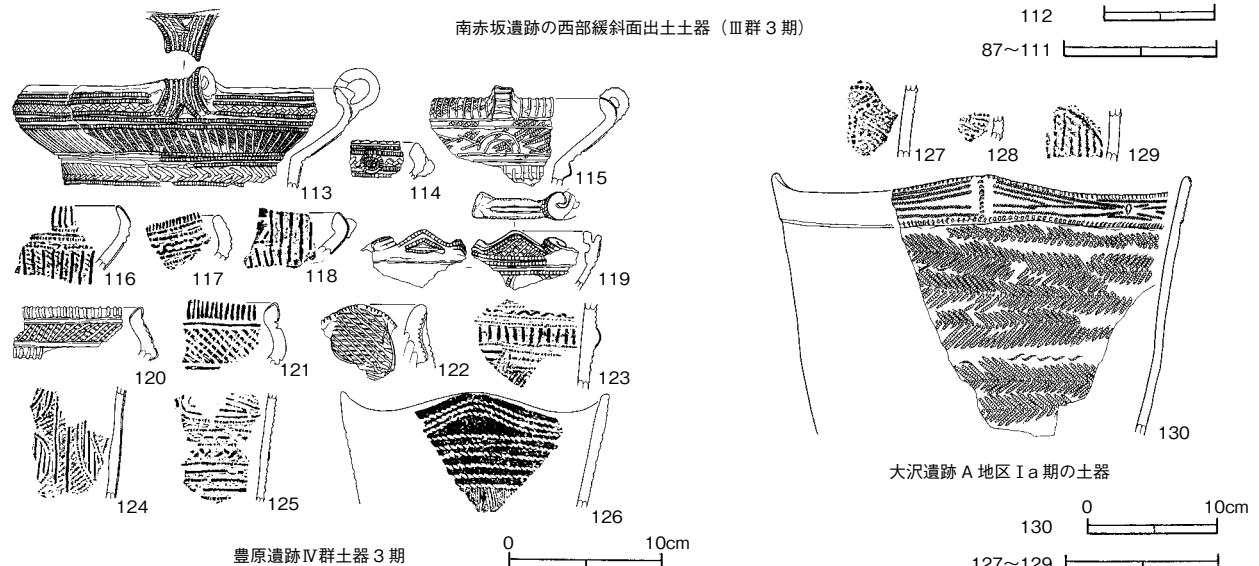
南赤坂遺跡の東部尾根出土土器（Ⅲ群3期）

0 10cm



南赤坂遺跡の西部緩斜面出土土器（Ⅲ群3期）

87~111 0 10cm



大沢遺跡A地区Ia期の土器

130 0 10cm
127~129

豊原遺跡IV群土器3期

0 10cm

図8 南赤坂遺跡・豊原遺跡・大沢遺跡A地区の前期終末後葉土器

おり、本遺跡群との平行関係を検討しながら土器様相を比較する。

豊原遺跡の前期終末土器は、前葉と後葉に中心をもつ。前葉段階の土器（第7図1～22）は東北南部系の隆帶・肥厚帶・沈線文土器（1～15）が卓越し、これに東北南部系の球胴形浮線文土器（16・17）や前期後葉「刈羽式」の系譜をひく在地土器（18・19）、北陸の鍋屋町系土器（20～22）が付随する。以上の中で、東北南部系土器には植物纖維が高い頻度で含まれる。

中葉に入り豊原遺跡の土器量は激減するが、これに代わって南赤坂遺跡から中葉～後葉古段階の土器が多量に出土した。主体をなすのは東北南部系の隆帶・肥厚帶・沈線文土器と球胴形浮線文土器で、前者が52%、後者が27%を占める。これに次いで多いのは7%の重稻場I群類似土器と6%の浮線E種で、朝日下層系土器や松原系土器、東北系と北陸系の折衷土器、東北系の竹管沈線文土器がそれぞれ1～2%の割合で付随する。報告書の中で筆者はこれらを3時期に区分したが、今村啓爾氏の見解〔今村2006b〕をふまえながら再検討を行う中でいくつかの誤りに気付いたため、次のように訂正する。

前期終末前葉を1期とする。資料数は僅少で、豊原遺跡に類例がある第7図23・24などが該当するのみである。同図25～68を2期とする。このうち重稻場遺跡群との比較が可能な資料は、45～68である。これらは重稻場I群土器と類似度が高い45～51・62～64と重稻場で欠落もしくは少数資料にとどまる52～61・65～68に二分できる。後者の52～56は浮線A1種による帯状文様に太目の粘土紐を並走させ、斜行格子目文（56a）や菱形文（54）を複合施文するもので、東北南部系との折衷土器にあたる57にも同様の菱形文が描かれる。61は重稻場I群の指標となる浮線状文の下に朝日下層式で一般的なY字文を施す。南赤坂遺跡では重稻場遺跡群に乏しい浮線E種（65～68）も定量存在しており、波状口縁中間部にあたる65は緩やかに内折する。これらはいずれも重稻場I群段階の中では後出的な資料と位置づけられ、I群土器の新旧区分がこれによって可能になる。

前期終末の豊原遺跡と南赤坂遺跡は、補完的な関係で推移する。真脇式土器に関する今村啓爾氏の変遷観〔今村2006b〕に従えば、南赤坂遺跡の2期土器群は重稻場I群以前・I群古段階・同新段階平行期に細分できる可能性が高く、東北南部系の隆帶・肥厚帶土器（25～33）と球胴形浮線文土器（34～44）が各段階の主体をなしたと考えられる。この段階の東北南部系土器の変遷については明確でないが、前者の中で台形突起を配す31、縦位や菱形などの太い隆帶を配す25～28・30・32・33などはI

群古段階から新段階、後者の中で口縁部に浮線A2種による連続山形文や波状文を施す34～36・43・44は重稻場I群以前～I群古段階、太い隆帶を複合する42や口縁部に菱形文を配す37～40はI群新段階を中心とする可能性を指摘したい。

一方、南赤坂遺跡の東部尾根では重稻場I群類似資料をほとんど混じることなく53個体の土器が出土した。これをもって3期とし、第8図69～86に主要資料を示す。85は朝日下層式に一般的な浮線斜行格子目文と東北南部系の隆帶文を複合する折衷土器である。周辺から出土した浮線文土器（72～84）は東北南部系の浮線A2種を多用するが、重稻場II群の指標となる浮線C種（72）や鋸歯状文（73）・橋状把手（80）が存在する。隆帶・肥厚帶土器（69～71）は占有率を低下させながら含纖維土器の割合も大幅に減少しており、これらが重稻場II群段階に並行することをうかがわせる。

西部緩斜面出土土器の中から同時期とみられる資料を第8図87～112に抽出した。このうち橋状突起（87～90・97・100）、珠文（98・99）、浮線C種（92～99）、朝日下層系土器（102～107）、松原系土器（108～111）は重稻場II群との類似性が指摘できる資料であるが、第2遺跡（重稻場西遺跡）や第3遺跡（上田遺跡）南西地区で高率を示す松原系土器が乏しい点は大きな相違点となる。

南赤坂遺跡では、朝日下層式新段階に至り土器量が減少する。角田山麓においてもこの段階の良好な一括資料に欠けるが、豊原遺跡で比較的まとまった土器が出土しており、その一部を第8図113～126に示す。本遺跡群の北方4kmに位置する大沢遺跡A地区が成立するのもこの時期で、断片的な資料ではあるが第8図127～130が出土した。ともに東北南部系の球胴形土器が姿を消し、東北北部の円筒下層d式系土器（126・130）が加わる点が特徴的である。

以上のように、角田山麓の前期終末遺跡群は一遺跡あたりの継続期間が短く、土器の様相も一様ではない。しかしこれを系列に基づき整理するとその在り方が鮮明になる。十三菩提式期前葉～中葉の当地では、東北南部系土器を主体とする豊原・南赤坂遺跡と北陸系土器が卓越する重稻場遺跡群の二者が存在した。中葉段階に集落として成立する重稻場遺跡群は今村啓爾氏が説くところの北陸集団の北上〔今村2006b〕によって生まれた遺跡と考えられ、東北色が強い当地に現れた外来集団とみなすことができる。「日本海のランドマーク」をなした弥彦・角田の山並みは、本遺跡群の成立に関わる重要な地理的特性となった。本遺跡群は朝日下層式古段階をもって終息する。直後に出現する大沢遺跡A地区は後述のよ

うに黒曜石利用においてもつながりがあり、重稻場遺跡群廃絶後の移動地とみられる。

出自を異にした二つの集団は、排他的な関係にあったわけではない。南赤坂遺跡では重稻場Ⅰ群新段階の土器がまとまって存在し、重稻場第1遺跡の含纖維土器は南赤坂遺跡との関連性を示す。重稻場Ⅱ群段階になると搬入品の可能性が指摘できる資料は互いに減少するが、重稻場第2遺跡（重稻場西遺跡）・第3遺跡（上田遺跡）を特徴づける球胴形土器や南赤坂遺跡3期の浮線C種などは両遺跡の密接な関係を物語る。前期終末において角田山麓が遺跡密集地帯をなす理由は、二つの集団が共存しながら短期間のうちに居住地を移動させたため、と考えられる。角田山の周辺に展開する多様な自然環境〔前山2005〕は、こうした活動を可能にさせる大きな背景となつた。

(4) 黒曜石

A 重稻場遺跡群の黒曜石

本遺跡群の石器を最も特徴づけるのは、剥片石器の中に占める黒曜石の割合が越後平野周辺の縄文時代遺跡にあって極めて高い点にある。遺跡と地区ごとに占有率を求めるとき、数値が最も高いのは第2遺跡（重稻場西遺跡）で、290点中89%に達する。これに次いで第1遺跡（重稻場遺跡）でも高率を占め、57点中84%を記録する。その一方で第3遺跡（上田遺跡）では率が低下し、南西地区で1,901点中71%、北東地区で791点中56%にとどまる（第12図C）。黒曜石以外の使用石材は鉄石英・頁岩・流紋岩・泥岩・玉髓からなるが、遺跡や地区で明確な違いは見られない。

本遺跡群の黒曜石は、産地構成に大きな特徴がある。第3遺跡（上田遺跡）北東地区の10点を対象とした熱中性子放射化分析によれば、総てが長野県星ヶ塔産石材であることが判明した〔金山・前山・鈴木1995〕。これらは透明度の高い岩体に黒色の晶子が雲状または筋状に混じるものが多く、肉眼観察によっても同様の資料がほとんどすべてを占める。このほか、やや濁りをもち和田岬産石材の可能性が高い資料も存在するが、その数は第3遺跡（上田遺跡）南西地区の石核1点（第11図133）と剥片3点にすぎない。

第9～11図に本遺跡群の黒曜石を示す。第9図1と第10図113・114は第1遺跡（重稻場遺跡）採集資料。1は原石、113は石鎌、114はその未成品である。第9図2～35・第10図36～112・115～121は第2遺跡（重稻場西遺跡）採集資料。2～11は石核、12～112は剥片、115～120は石鎌、121はその未成品である。第12図は第3遺跡（上田遺跡）出土資料。122～135が石核、136～171が微細剥

離痕をもつ剥片、172～174が石鎌、175～178がその未成品、179～184が石錐である。このうち石核125・127・129・131が北東地区、これ以外が南西地区からの出土である。図中の矢印は微細剥離痕の範囲、網点は自然面、砂目は欠損部を表す。なお、第1遺跡・第2遺跡と第3遺跡で作図法が異なるのは実測年が異なるため、前者は主として1991年作成の実測図をトレースした。

これらの中で本遺跡群に搬入された黒曜石の姿がわかるのは、第1遺跡（重稻場遺跡）採集の原石（第9図1）である。最大長6.4cm、最大厚4.2cm、重さ196gを測り、中部高地での黒曜石集積例の中では中型品クラスに相当する〔大工原2002〕。以下では、数量的にまとまつた第2遺跡（重稻場西遺跡）採集資料と第3遺跡（上田遺跡）南西地区出土資料を中心に本遺跡群の剥片と石核を検討する。前者は黒曜石利用率のうえで高率遺跡、後者は準高率遺跡にあたる。両遺跡はⅡ群新段階の土器が大半を占めており、黒曜石についても同時期の資料とみなされる。

第12図A・Bは、最大長と最大幅が明らかな剥片をもとに、第2遺跡（重稻場西遺跡）101点・第3遺跡（上田遺跡）南西地区210点をプロットしたものである。剥片の大きさをLL～Sに区分し遺跡ごとに占有率を求めるとき、第12図Cのようになる。極小サイズのSSについては、回収率が二遺跡で異なる可能性があるため除外した。本遺跡群の黒曜石は、主として石鎌の石材として使用されていた。石鎌製作に適した剥片は、Mサイズ以上である。図のように、第2遺跡（重稻場西遺跡）の剥片は長さ2.0cm～2.4cm台、幅1.5cm～1.9cmにピークをもち、Mサイズを中心がある。これに対し、第3遺跡（上田遺跡）南西地区では長さ1.5cm～1.9cm台、幅1.0cm～1.4cm台にピークをもち、Sサイズが60%台の高率を占める。図示した資料は、第2遺跡（重稻場西遺跡）採集の第9図12・15・25・29がLL、13・14・16～24・26～28・30～35がL、第10図36～79がM、80～112がS。第3遺跡（上田遺跡）南西地区出土資料では、第11図136～140がL、141～159がM、160～171がSである。

二遺跡での剥片サイズの異なりは、石核にも表れている。両遺跡の石核はいくつかのバリエーションをもち、幅広い単一の打面から連続的な剥離を行うA種、素材の形状がうかがえるB種、頻繁な打面転移によって小型化するC種、両極打法によるD種に大別できる。これを遺跡ごとに見ると、第2遺跡（重稻場西遺跡）ではA種（3）・B種（2・4～7）・C種（8～10）からなり、最終剥離面での作出剥片は10がLサイズ、3・4・7がMサイズである。一方、第3遺跡（上田遺跡）ではB種（122）・C種（123～129）・D種（130～135）からなり、A種はみ

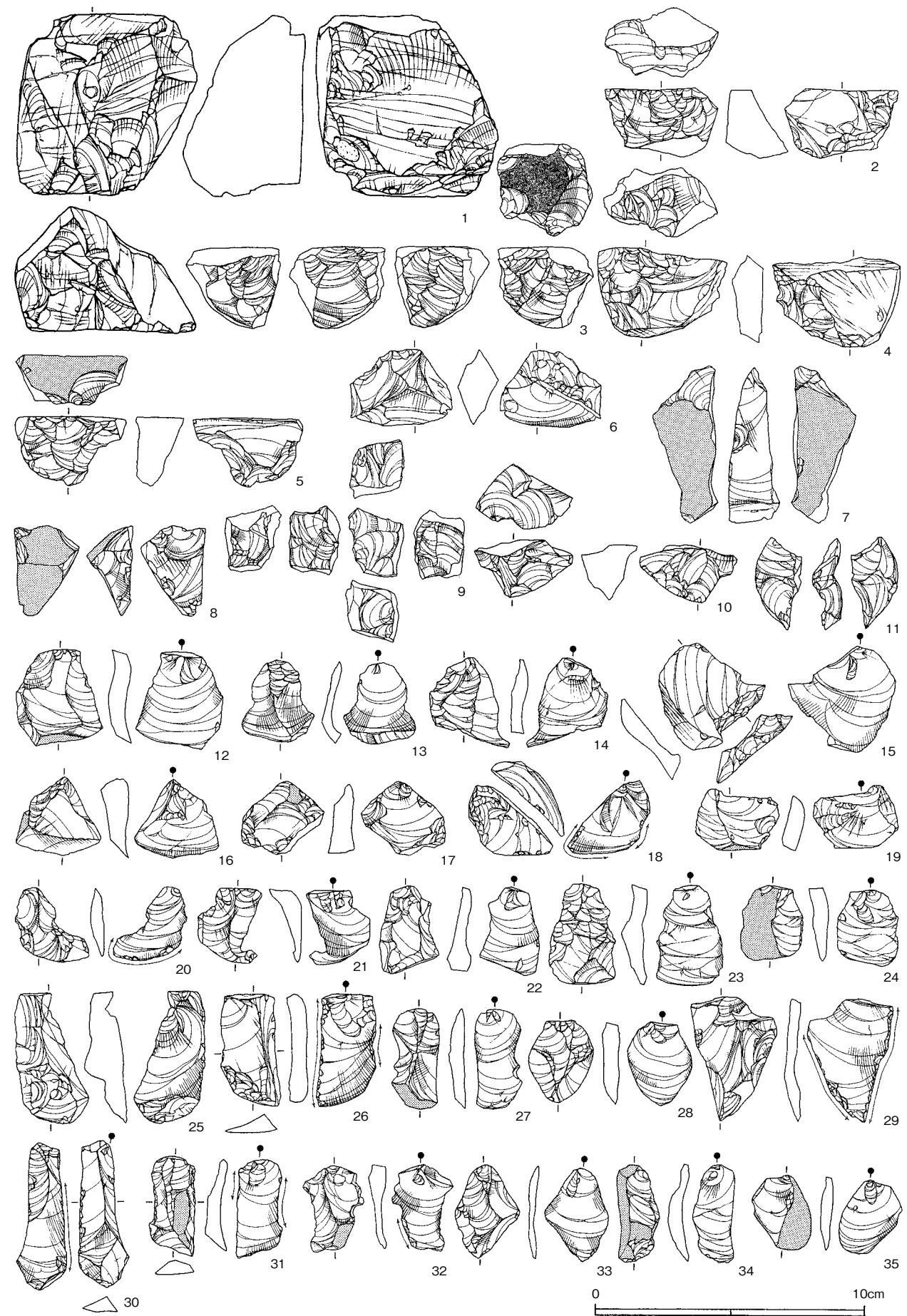


図9 重稻場第1遺跡（重稻場遺跡）の黒曜石原石と重稻場第2遺跡（重稻場西遺跡）の黒曜石製石核・剥片

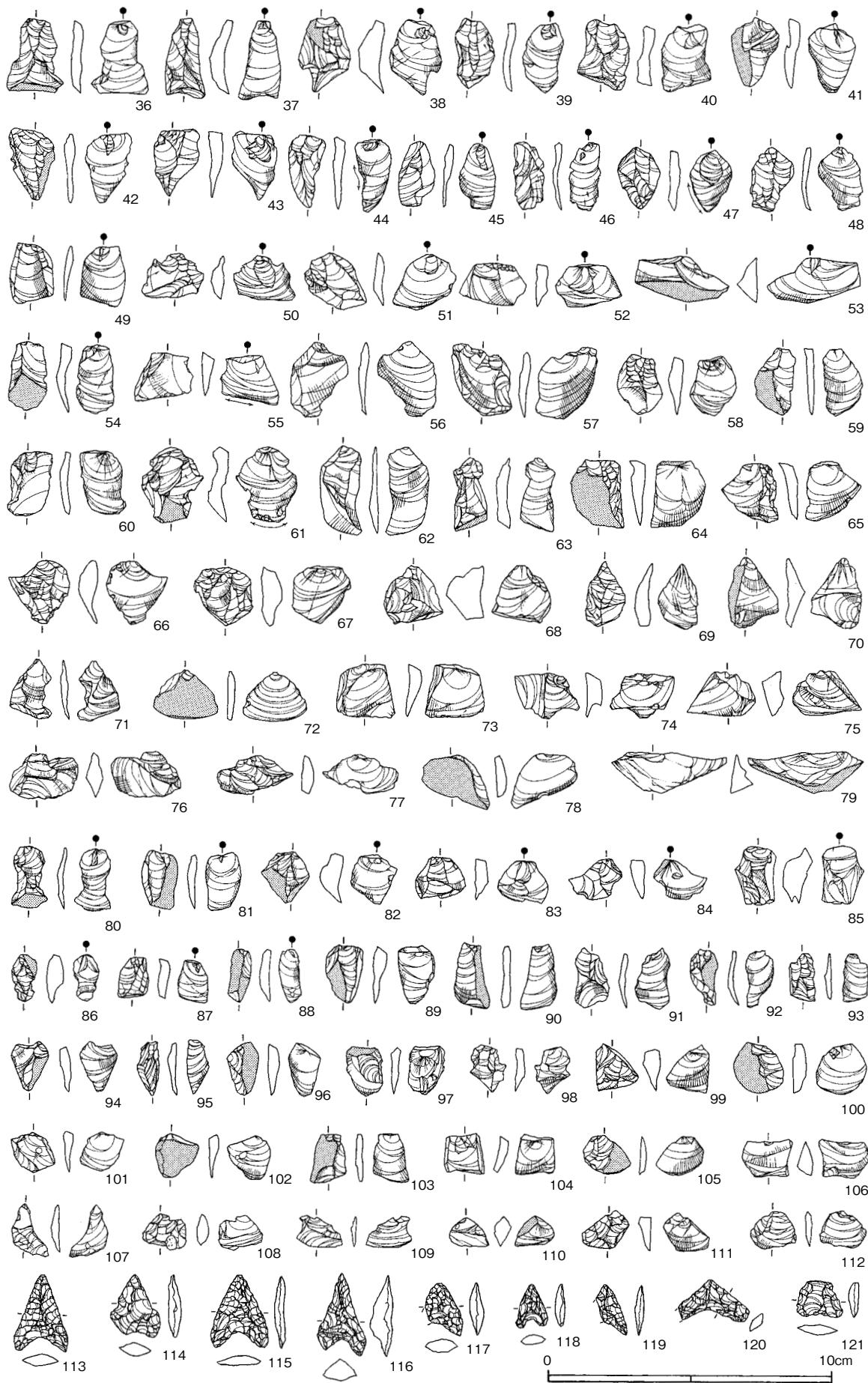


図10 重稻場第2遺跡(重稻場西遺跡)の黒曜石製剥片・石核と重稻場第1遺跡(重稻場遺跡)の黒曜石製石鎌

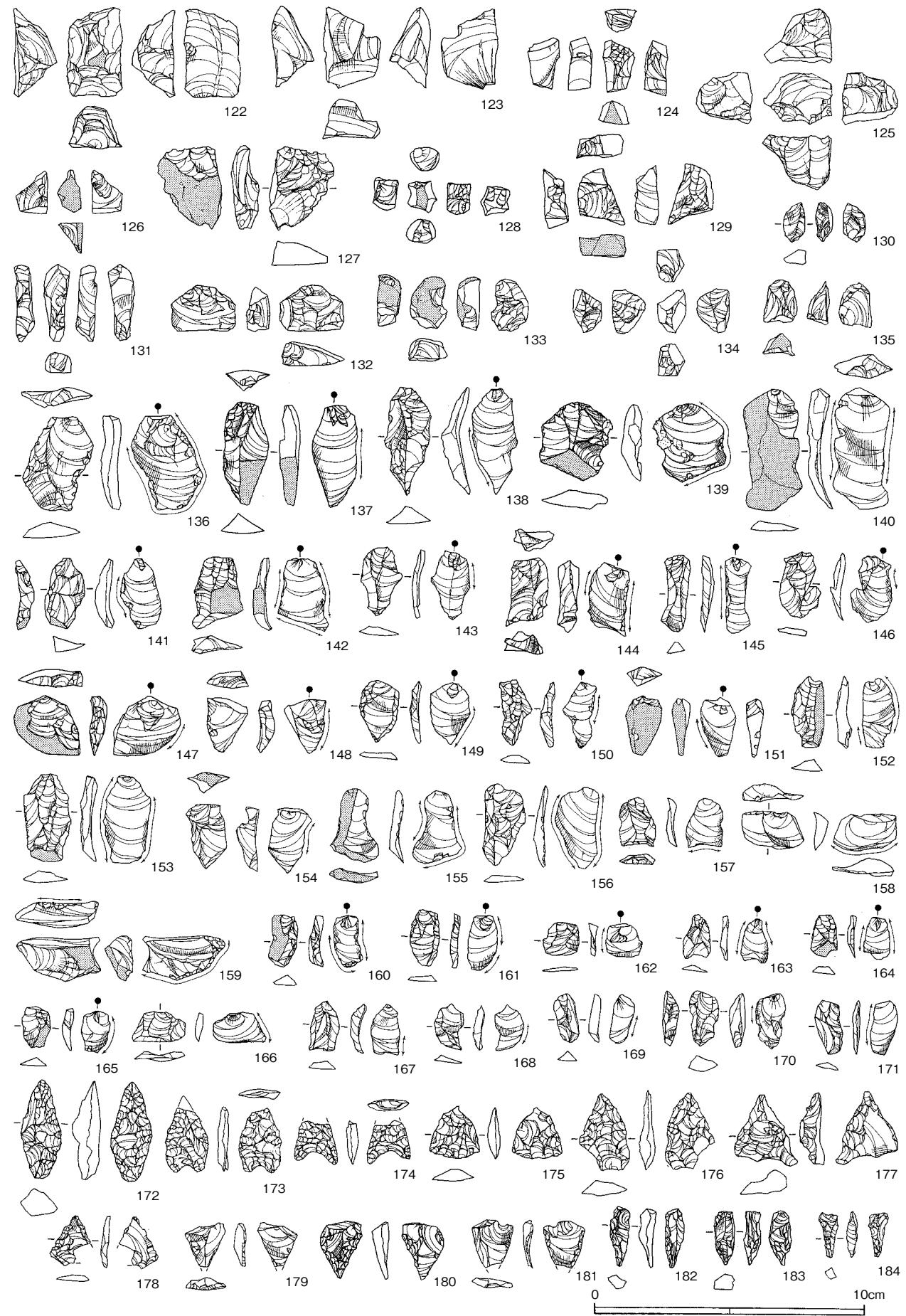


図11 重稻場第3遺跡（上田遺跡）の南西地区の黒曜石製石核・使用痕剥片・石鎌・石錐

られない。最終的な作出剥片は、いずれもSやSSサイズである。Sサイズでの自然面保有率が第2遺跡で44%、第3遺跡南西地区で34%を示し後者の率がいくぶん低い点は、剥片剥離の進行に由来した現象と言える。

遺跡間での石核・剥片サイズの異なりに関連し、剥片の腹面に残る「バルバースカー」に着目したい。これは剥片作出にあたり打点直下のバルブ上に生じた小剥離痕で、実測図右上に示すドットは保有資料を表す。両遺跡における「バルバースカー」をもつ剥片は、サイズが小型化するにつれて出現率が低下する傾向にあり、その有無がハンマーや加撃法の違いに由来することをうかがわせる。バルバースカー保有率を比較すると、第2遺跡（重稻場西遺跡）ではLサイズ83%・Mサイズ48%・Sサイズ28%である。これに対し第3遺跡（上田遺跡）南西地区では、Lサイズ67%・Mサイズ79%・Sサイズ46%となり、Mサイズで30%、Sサイズで20%あまりの高い数値を示す。ちなみに、本遺跡群の北3kmに位置する前表遺跡でも多量の黒曜石製剥片が採集されている。この遺跡は朝日下層式直後の新保式I期を中心をもち、黒曜石の利用率や剥片サイズが第3遺跡と類似する（第12図C）。前表遺跡でのSサイズのバルバースカー保有率は48%を示し、第3遺跡（上田遺跡）南西地区的数値に近似する。したがって、第2遺跡（重稻場西遺跡）と第3遺跡（上田遺跡）南西地区の間に認めるバルバースカー保有率の異なりは、両遺跡における小型石核の多寡にも関連し、剥片剥離手法の違いに由来する可能性が高い、と考えることができる。

第3遺跡（上田遺跡）南西地区では、使用痕とみられる連続的な微細剥離をもつ剥片が91点確認できた。この中にはSサイズ（160～171）が最も多く、その割合は64%に達する。182・183はSサイズの両極剥片を素材とした石錐で、石核D種と対応する資料である。第2遺跡（重稻場西遺跡）と較べ、小型剥片の利用率が高い点も大きな特徴となる。

筆者は以前、黒曜石利用率が低い遺跡における大型剥片の乏しさを石器素材に適した剥片の多くを消費したため、と解釈したことがあった〔前山2014〕。しかしそれだけでは十分な説明と言いがたく、低利用率遺跡での小型剥片への偏りは、それらの量産と有効利用が相まって生じた現象であろう、と考えるに至った。旧稿での解釈をここに訂正する。

B 信州産黒曜石の流通

角田山麓における黒曜石の利用は、前期終末に本格化する。それ以前は剥片石器自体の出土量が少なく〔小野・前山ほか1987〕、本遺跡群での信州産黒曜石の大量出

土は角田山麓において大きな画期をなしている。

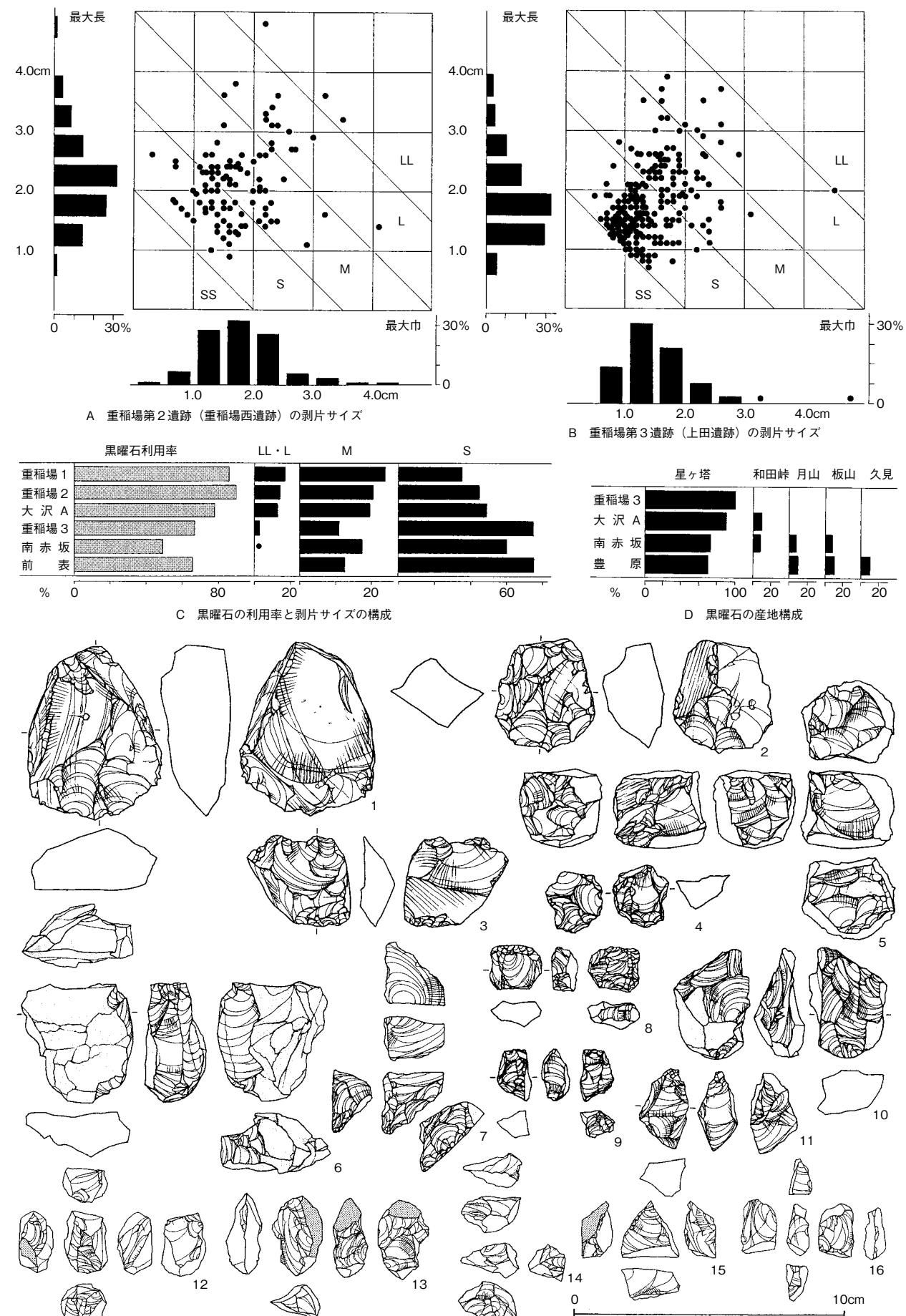
当地で黒曜石の高率利用遺跡が存在するのは中期前葉までの期間であるが、この時期の黒曜石利用率は遺跡間での変異が著しく、重稻場遺跡群の他に80%を上回るケースは本遺跡群廃絶後の移動地とみられる大沢遺跡A地区の前期終末～中期初頭段階に限られる。前述のように、重稻場遺跡群ではほとんどすべてが星ヶ塔産石材によって占められる。大沢遺跡A地区の成立期にあたるIV層出土資料は星ヶ塔を主しながら和田峰が付随する内容で（第12図C）、信州産石材に集中する本遺跡群の特徴と合致する。同地区出土の石核はA種（第14図5）やB種（同図1・2）を主体とし、剥片サイズにおいても第1遺跡（重稻場遺跡）や第2遺跡（重稻場西遺跡）に近似する（同図C）。

これに対し、豊原遺跡の黒曜石利用率は前期終末～中期前葉層準で3～9%にとどまり〔小野・前山ほか1988〕、本遺跡の北1kmに位置する峰岡城山遺跡（中期前葉）でも4%にすぎない〔新潟市教委2015〕。その一方で、南赤坂遺跡と前表遺跡での占有率は50～60%台にのぼるが、いくつかの点で第1遺跡（重稻場遺跡）・第2遺跡（重稻場西遺跡）や大沢遺跡A地区と特徴を異にする。南赤坂遺跡では、星ヶ塔産黒曜石を主体としつつも山形県月山や阿賀北の板山産石材が加わる。南赤坂遺跡から出土した第12図6は、原石の大きさがわかる剥片剥離初期の石核である。第1遺跡（重稻場遺跡）の原石に較べそのサイズは明らかに小さく、この遺跡に供給された黒曜石の姿を示唆している。剥片サイズを見ると、南赤坂遺跡や前表遺跡ではSサイズに中心をもつ。これと対応するように両遺跡の石核は南赤坂遺跡（第12図6～11）でA種が欠落し、前表遺跡（同図12～16）ではC種に限定される。

以上述べてきたように、角田山麓では信州産黒曜石を多量に保有する遺跡とその量が制約される遺跡が共存していた。前者は第1遺跡（重稻場遺跡・真脇式期）から第2遺跡（重稻場西遺跡・朝日下層式期古段階）を経て大沢遺跡A地区（同新段階～新崎式期）へと連なる一系列の黒曜石多量保有集団の存在を意味しており、このグループによって黒曜石の入手と供給が行われていたのであろう。

ちなみに角田山麓では、前期前葉以来西頸城産の蛇紋岩を石材とする磨製石斧の製作が行われていた。前期終末～中期前葉の南赤坂遺跡と豊原遺跡では、製作時に生じた未成品や砥石がまとめて出土し、自給量を超えた石斧作りがなされた可能性が高い。出自を異にした二つの集団は、石器石材や製品の入手にあたり、相互補完的な役割を担っていたことをうかがわせる。

本遺跡群において黒曜石の利用率・剥片サイズ・石核



の在り方が遺跡間で異なることを前項で指摘した。そうした事象が意味するところを最後に考える。重稻場遺跡群や大沢遺跡A地区居住集団を中心とした黒曜石の流通範囲は、角田山麓にとどまるものではなかった。対岸佐渡の吉岡物社裏遺跡（前期終末主体）では、佐渡島内産の黒曜石と共に信州産黒曜石が出土している。後者の内訳は星ヶ塔85%、和田峠15%からなり〔藁科・東村1988〕、大沢遺跡と近似した在り方を示す。大沢遺跡の西3kmたらばに位置する角田岬は、越後の中で佐渡との最短地点にあたる。角田山麓は信州産黒曜石を多量に出土した北限の地でもあり〔大工原2002〕、佐渡への供給地は当地以外に考えられない〔前山1996〕。

重稻場遺跡群や大沢遺跡A地区で多量に出土した信州産黒曜石は良質石材で、ブランド品として広範囲にわたり流通していた。青森県三内丸山遺跡の黒曜石の中に3%の割合で確認された同地産石材〔藁科2005〕は、その好例となる。秋田県内では中期前葉を中心とした北陸系土器が一般的に出土する現象が知られており〔富樫1984〕、日本海を経由した活発な地域間交流を物語る。このうち秋田市下堤D遺跡は重稻場I群古段階の土器が出土した小規模遺跡で、北陸集団が残したコロニーの可能性が高い同市周辺最古の事例となる〔今村2006b〕。この遺跡の成立には重稻場第1遺跡が関与したこととも考えられ、本遺跡群や大沢遺跡A地区に備わる交易従事集団としての性格を想起させる。

渡辺仁氏によれば、「航洋交易」を行う狩猟採集民は経済的なゆとりをもった階層化社会の人々で、近世アイヌや北米西海岸の交易実施者は、地域社会の首長ないし上部階層者に限られた〔渡辺1990〕という。こうした民族例からの類推が適切であるとすれば、重稻場遺跡群には二つのグループが存在し、信州産黒曜石の調達・流通にあたり中核的な役割を担った第1・第2遺跡と従属的な立場にあった第3遺跡に分かれる、という図式が想定できるのではなかろうか。

重稻場遺跡群の移動先とみられる大沢遺跡では、似た現象をより鮮明な形で見ることができる。遺跡の広がりは東西600m・南北300mにおよび、尾根や高度を異にして4つの地区に分かれる。中期前葉の段階で各地区はそれぞれ小集落をなしたと考えられるが、黒曜石が卓越するのはA地区だけで、他の地区では10%以下にすぎない。石器組成にも大きな違いがあり、A地区の石鏃出現率は他の地区を圧倒する。筆者は以前こうした現象について、複数集落から編成される集団獵がこの時期の角田山麓で行われ、A地区居住集団がその主導的役割を果たした可能性を指摘したことがある〔卷町教委1990〕。黒曜

石の保有量に認める不均等な在り方を含め、縄文時代における重層化した社会の一端を示す事例と考えたい。

文献

- 今村啓爾 2006a 「松原式土器の位置と踊場系土器の成立」『長野県考古学会誌』第112号
- 今村啓爾 2006b 「縄文前期末における北陸集団の北上と土器の動き」『考古学雑誌』第90巻第3・4号
- 上原甲子郎 1956 「弥彦角田山周辺古文化遺跡概観」『弥彦角田山周辺総合調査報告書』新潟県教育委員会
- 小野昭・前山精明ほか 1988 「卷町豊原遺跡の調査」『卷町史研究』IV 卷町
- 金山喜昭・前山精明・鈴木正男 1995 「縄文時代の日本海沿岸部における黒曜石の交流」『日本考古学協会第61回総会研究発表要旨』
- 金子拓男 1996 「重稻場式土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 新発田市教育委員会 2003 『二夕子沢A遺跡発掘調査報告書』
- 大工原豊 2002 「黒曜石の流通をめぐる社会」『縄文社会論』上 同成社
- 寺崎裕助 1999 「新潟県における縄文時代前期の土器」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 寺崎裕助 2019 「第2章縄文時代 第2節土器 第3項前期」『新潟県の考古学III』 新潟県考古学会
- 富樫泰時 1984 「秋田県における北陸系土器について」『本庄市史研究』第4号
- 新潟県 1983 『新潟県史考古資料編』
- 新潟県教育委員会 1995 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 猿額遺跡』
- 新潟市教育委員会 2013 『峰岡城山遺跡 第2次調査』
- 新潟大学考古学研究部 1995 「角田・弥彦山東麓及び佐潟周辺の遺跡調査報告書」『FIELD NOTE』第7号
- 前山精明 1995 「重稻場遺跡群」『卷町史 資料編1 考古』卷町
- 前山精明 1996 「角田山麓の縄文文化」『卷町史 通史編 上』卷町
- 前山精明 2005 「水辺の営み—新潟県角田山麓縄文時代遺跡群の事例から—」『地域と文化の考古学』I 六一書房
- 前山精明 2014 「石器の材料・製作・使用」『講座日本の考古学 縄文時代 下』青木書店
- 前山精明・龍田優子 2017 「チューブ・デコレーション技法の再現実験」『新潟市文化財センターレポート』第4号
- 卷町教育委員会 1990 『大沢遺跡』
- 卷町教育委員会 2002 『南赤坂遺跡』
- 山口栄一 1981 「重稻場・道上両遺跡の土器文様について」『まきの木』第12号
- 渡辺 仁 1990 『縄文式階層化社会』六興出版
- 藁科哲男 2005 「三内丸山遺跡出土の黒曜石製石器・剥片の原材料産地分析」『特別史跡三内丸山遺跡年報』8
- 藁科哲男・東村武信 1988 「佐渡島内遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地同定」『佐渡考古歴史会報』第12号